

日本の歴史 25

『日本開国：アメリカがペリー艦隊を
派遣した本当の理由』

渡辺惣樹 著(草思社 2009年)

本書の請求記号 210.5953-Wat

稲垣 宏行

嘉永6(1853)年のペリー来航は江戸時代が終わるきっかけとなった事件です。貿易商社での勤務が長い著者は、アメリカがペリーを日本に送った目的は、捕鯨や物資の補給地確保だけではなく、中国との貿易航路の確保や、日本を使って南下するロシアへの防壁とすることにあつたと見えています。本書はそれを証明するために、この時代に日本やアメリカ、中国などで生じた出来事も取りあげています。ペリー来航に直接関わるものばかりではありませんが、シーボルトの功罪、アヘン戦争の顛末なども併せて紹介しています。

その理由について、著者は本書の巻末で19世紀のフランス画家ジョルジュ・スーラの点描画の見方を例示しています。彼の作品と向き合う際に、それと十分に距離を置くと、最適な立ち位置が分かってくる。そして本書との向き合い方も同じだと著者は述べています。このように、一見独立して見えるアヘン戦争など前述の事柄を繋ぎ合わせて、本書はペリー来航の理由を点描画方式として解明しようとしているのです。これは特異な方法ではありませんが、一元的な見方になりがちな日本史の場合、この方式によって意外な側面に気付かされる人も少なくないと思います。

これを使うことによって、日本で国法に触れる事件を起こしたシーボルトの研究が、ペリー提督によって役立てられたことを関連付け、アヘン戦争についても、結果的に異国船打払令などに見る日本の対外政策の強硬論を軟化させる要因になったと著者は述べています。

日本での出来事に関する章では、江戸末期における徳川将軍家と大奥の墮落、物資を積んで江戸湾を定期的に訪れた弁財船などが紹介されていますが、それらもペリー来航の伏線として絡んでいると著者は考えているようです。その理由は、彼の来航が幕府の勢いの衰えた時期と重なったからだと思います。とりわけ、弁財船の寄港した江戸湾は江戸市民の生活を支えるものであり、その場所にペリー艦隊が停泊したことは経済的な打撃に繋がることで、かねがね防衛力の向上を幕臣や学者たちから指摘されていた場所であったのです。このように、当時は日本国内のシステムが随所で破綻をきたしていた時期でもありました。

また、本書では英国作家ジョナサン・スウィフトが1726年に出版した代表作『ガリバー旅行記』を取りあげています。主人公ガリバーが日本の「ザモスキ(横須賀の観音崎)」と「ナンガサク(長崎)」を訪れた話も出てきます。ガリバーは「日本の皇帝(将軍)は話せば分かる人物」と、その時の印象を語っています。このことは、当時アメリカやイギリスなど欧米諸国が、日本に好意的な印象を持っていたことを推測できる逸話です。ところが、天保8(1837)年、ガリバーのように観音崎近くの浦賀を訪れた民間船モリソン号は、日本人難民の引き渡しの交渉を幕府に拒否され砲撃されてしまいました。この事件は欧米の日本に対する印象を一変させ、砲艦外交とも言われたペリーの作戦を立てる伏線になったものと考えられます。

しかし、なぜ本書にこのような点描画の方式が取り入れられたのでしょうか。著者は、巻末で下田に滞在していたハリスの心境について書きたかったことを挙げています。ハリスは日本修好通商条約を締結した人物ですが、その実、外交キャリアに乏しく、しかも日本を威圧するだけの軍事力も与えられず、孤独な状況に置かれていたと言います。そんな彼の心境を表現するには、下田滞在時の様子を描写するだけでは足りないと感じたことが、著者が本書を著すきっかけとなったようです。ペリーの存在が際だつ一方、ハリスはなぜか小さく見えます。それは冒頭でも述べたように、アメリカの主な目的が中国との貿易であり、ハリスが託された日本との通商ではなかったからで、そこに空しい努力を重ねた彼の苦悩が表現されていると推察します。そして、これこそが、ペリーを通じてハリスを見ようとする著者が展開してきた点描画方式の極地と考えられます。

一国の歴史や世界の動きを見る上で、視野を広げることは大切です。本書で述べた点描画の方式は、この目的を効率的に展開しようとするものです。「黒船」や「ハリス」などのキーワードから、次元が異なった意外な出来事の共通点や関連性が認識できるだけでなく、国々の事情などを見られるという利点を確認できるものであります。

いながき ひろゆき(司書・係・情報サービス課)